

# 書評

ビジュアル パニーニ臨床生化学 原書第2版 ▶ S.R. Panini 著, 横溝岳彦 訳

ビジュアル パニーニ臨床生化学 原書第2版/S.R. Panini 著, 横溝岳彦 訳/南江堂 2023/A4変型判 544ページ 7,000円+税

今日手に入る生化学の教科書の種類はかつてないほど多い。本格的なものほとんどがアメリカで出版されたもので、日本語訳もたくさんある。また日本では、我が国の大学の実状に合わせた初歩的な教科書もさまざまなものが出版されている。しかし、ここに紹介する教科書は類書とは異なる特長をもっている。内容は本格的でかなり詳細であるが、本文は箇条書きで記述され、レジュメのような作りとなっている。それに加えて臨床との関連を強く志向している。簡潔な要約的記述と病気の話題という他にあまり類がないこの教科書は、歓迎する人も多いのではないだろうか。

本文は箇条書きで、数字→●→○という階層で書かれており、一つのまとまりが短いので読み易く、要点を的確に理解できる。しかし、要約だけにとどまらず、特筆すべきは色分けされた三種類の囲み記事である。【基礎知識】(約110項目、以下同様)、【アドバンス】(70)そして本書の目玉でもある【臨床とのつながり】(240)、が豊富に用意され、これらが通読するときのリズムにもなり、興味を持続させる効果もある。【臨床とのつながり】は医学分野以外の人でも興味を持てるものが多いと思う。治療法にまで触れられていることもあり、代謝を考えると納得できるので理解も深まる。

三種類の囲み記事でどのようなことが説明されているか、酸化リン酸化の項から簡単に紹介してみよう。【基礎知識】ではP:O比、NADHとFADH<sub>2</sub>の供給源、1日のATP生産量などが扱われている。【アドバンス】にはユビキノラジカルの解説があり活性酸素種に触れている。

【臨床とのつながり】は数が多いが、例えば、ロテノンの毒性、アミタールの鎮静作用と虚血再灌流時の心筋保護作用という異なるしくみの違い、シアン化合物による中毒とその治療法、赤色ぼろ線維症、抗ウイルス薬として用いられるヌクレオシドアナログ薬剤の作用メカニズムとその副作用として疲労が起こる理由など、どれも興味深く読むことができる。

本書の要約の仕方は的を射ており、翻訳も含めて簡潔明瞭である。さらに、類書にあまりないと思われる取り扱い方もある。一例を挙げれば、糖代謝の冒頭には各組織の糖のトランスポーターがまとめて図示されて説明されており、なるほどと思った。また、全体を通して代謝の図には臨床的に影響を与える物質が明示され(アスクレピオスの杖のマークがついている)、それらに対応する薬剤がある場合は、その商品名や製薬会社名まで出ているので、自分が使っている薬について改めて認識するということもあるだろう。

本書は教員・研究者にも学生にも推薦できる。特に医学部や医療関連学部で生化学の講義をしている人で、教科書も色々眺めてきており、常日頃講義の内容や進め方を考えている人にとっては、自分の知識をより俯瞰的にできるし、限られた講義時間でのまとめ方のヒントが得られ、さらに学生の興味を引く臨床的話題を提供する役にも立つだろう。学生には、各項目の要点を容易に掴むことができ、同時にさまざまな病気について学ぶことが可能である。また問題と詳しい解説がある(全ページの40%を占める)ことも役に立つだろう。独自の特長をもった新たな教科書として、実際に手ににとってご覧になることを強くお勧めする。

(北里大学名誉教授 中村和生)